

2019年9月

聖句随想・折々の言（ことば）

「今、共に、福音にあずかるために」

牧師 森 言一郎

「福音のためなら、私はどんなことでも
します。それは、私が福音に共にあず
かる者となるためです」

（第一コリント書 9章23節）

私が曲がりなりのサラリーマン生活を経て、
あるいは、B型肝炎との闘病をしながら、
福音伝道のために献身したのは1989年・平成元年
のことでした。今年は2019年・令和元年ですから
30年が過ぎたことになります。

もうそんなに、という気持ちもありますが、あっ
という間の30年でした。そんな私も来年は還暦。30
年前ならば定年退職後を真剣に考え始める年代で
す。

*

使徒言行録 20 章 24 節にパウロが語った、「しかし、自分の決められた道を走りとおし、また、主イエスからいただいた、神の恵みの福音を力強く証しするという任務を果たすことができさえすれば、この命すら決して惜しいとは思いません。」という言葉があります。献身の志が与えられた頃に大切にしていたみ言葉です。

今、伝道に燃えていた献身当時の思いが変わり果ててしまった、等ということはこれっぽっちもありません。というよりも、旭東教会に着任してからの私自身の歩みを考えると、「あー、根っこはまったく変わらないなあ」と思います。

*

8月末、私は伝道者になるための学びをした東京目白にある母校・日本聖書神学校の卒業生研修会に二泊三日の日程で参加しました。昨年は

福島県での研修で東日本大震災の被災地や教会を訪ね目を開かれましたが、今年は母校を会場にしての研修会でした。

丁寧に準備された、天皇制や大嘗祭とキリスト教の宣教に関する講演が二つ、靖国神社でのフィールドワークもありました。さいごは、母校の中国支部長に選任され、これからのことを色々と考えさせられています。

*

そんな中で、もう忘れかけていたことを思い出させてくれることが研修会の時にあったのです。

それは、パウロが、何かと問題の多かったコリントの教会宛てに記した第一の手紙9章23節で「福音のためなら、私はどんなことでもします。それは、私が福音に共にあずかる者となるためです」と語っていることに繋がることでした。

*

実はこの度の研修会で何人かの方から、「森先生、利尻昆布、今も教会で購入し続けていますよ」「あれは本当にいいですねえ。手土産にもなるし喜ばれます」「幼稚園の給食に毎日使ってるよ」と声掛けされたのです。

私はここで、前任地の北海道・稚内教会のことをあれこれ語りたいのではありません。ただ、思い当たったことがあるのです。「旭東教会での今と、稚内に居た頃のオレは、何も変わっていない」ということでした。その意味する所は何でしょうか。

*

それはとても単純なことなのです。今与えられている、ここでの働き場を、神が備えられた最善の場だと信じてベストを尽くす、ということでした。

これは私の父・誠太郎が、日頃から自らに言いき

かせるように言葉にし、私にも語っていたことなのです。

今の私は、出来る限りの知恵と力を尽くすだけでなく、祈りをもって、み言葉を信じて生きて行くという術が与えられています。

少しオーバーに聞こえるかも知れませんが、自分自身が生きて来た人生の文脈と、教会。そして時代の文脈との出会いと紡ぎのわざの中で、今も新たなことに挑戦しつつあるなあ、ということが実感としてあるのです。

*

以下、二つのことを具体的に記してみます。

先ず一つ目は、「外部向けの葬儀専用ホームページ」を作成したことで皆さんにもご紹介出来るようになっている働きです。

旭東教会ではこれまでも外部の方の葬儀をお引き

受けしてきましたが、これまで以上に、近郊の方でキリスト教の葬儀を願う方やご家族のために、ぐっと力を入れ、積極的に力を尽くす教会として歩み出そうというものです。これは、旭東教会の伝道のためでもありますし、今後の課題でもある教会財政のために少しでも役に立つならばという願いが根底にあります。

そのために、私個人の経験や賜物を生かすだけでなく、出会いを与えられている方々の、これまた異なる賜物と力添えを頂きながらチャレンジをしようというものです。

*

➤ の地でお知り合いになった三つの葬儀屋
┌ さんの社長さんや営業部長・館長という
お立場の方たちと相談をし、助言を頂き、「積極的な協力をお約束します」とのお言葉を頂きました。

ほぼ同時期に、私自身も「キリスト教葬儀研究所」の正式な研究員とならせて頂き、学びを深めて行

く覚悟をもっています。

敢えて記させて頂くなら、日本各地の教会で、葬儀専用ホームページなどというものを開設している教会を見たことも聞いたこともありません。

*

稚内教会で「利尻昆布バザー」を掲げ、教会の宣教の一助とするために必死になって旧知の教会の牧師に電話を入れ、役員会宛に手紙を書き続けたこと。

『こんぶ通信』なる新聞を書き、「私がこんぶ牧師の森言一郎です」等と言っていたこと。地元稚内ほか、海を越えて利尻島に渡り、素晴らしい漁師さんと出逢えたこと。

教会の皆で礼拝後に袋詰めをしたこと、段ボール箱に箱詰めし、伝票書きをして発送作業を続けたこと等々。本質的には今始めようとしていることと何も変わらないと思っています。

*

あ たらしい取り組みは、旭東教会、そして兼務する十文字平和教会で求められる牧師としての働きと別物ではないのです。

礼拝、祈祷会ほかの働きは当たり前に一所懸命に続けますし、それ抜きの私はあり得ません。聖書の学びは私の喜びであり息抜きでもあります。

*

し かしその一方で、結果的に「森牧師は葬式牧師だ」と呼ばれることがあっても構わないのです。

天幕づくりをしながら宣教に仕えたパウロが語った、「福音のためなら、私はどんなことでもします。それは、私が福音に共にあずかる者となるためです」を思います。

彼も「なんだ、テント作りのパウロか」と言われていたかも知れません。葬儀専用ホームページを開設して、やれるだけのことはやってみようじゃないか、という熱き思いは、聖書のみ言葉から教えられ支えられていることなのです。

*

つ目は、「ちょっと一息 休もう屋」の
取り組み開始です。これもまた記し始めると様々なことを説明する必要があります。

決してけっして、単なる思いつき程度で、役員会に相談し、これまた専用ホームページをつくり、グリーンケアの集いの外部のノンクリスチャンのメンバーのお二人にボランティア参加して頂いているわけではありません。

見えざる文脈、神のみ手が働いているからこそ、今、実にささやかで小さな働きではあるけれど、福音の出来事としての芽生えがここにあるのを感じているのです。

*

ちよっと一息 休もう屋。こちらは教会財政の力にはなり得ないかも知れません。

しかし、もしかすると、岡山近郊の方々に、「西大寺にあるキリスト教の旭東教会って今の時代に必要なことを始めているのだねえ」と言われるようになる可能性が、茶さじ一杯程度はあるかも知れません。

岡山市内の一般家庭に 10 万部を超える部数が月に何度か届けられる地域情報誌二誌に、「〈ちよっと一息 休もう屋 9 月の会〉の案内を載せてもらえませんか？」と依頼してみました。

また、教会内のある方のあたたかなご助言もあり、山陽新聞の催事掲載ページにもスタッフが同様の依頼をしています。

*

旭 東教会の大切な会員である宇野稔さん（日本キリスト教団隠退教師）が、その活動の立ち上げの時期から関わられ、現在も理事長を務められる「NPO 法人岡山・ホームレス支援 きずな」が、キリスト教の枠組みを超えて多くの方たちと連帯し、行政とも力を合わせて長きに渡って取り組みを続けておられることは広く知られています。私はそのことが、いつも気になりながら、なかなか教会全体でその働きに参加することが出来ないため心苦しく思っていました。

*

介 護や看護に疲れ果てている方々やその周辺におられ、何かに一所懸命に頑張り続けている方の居場所を提供するという働きは、マタイによる福音書 11 章 28 節にあるイエスさまのお言葉、「疲れた者、重荷を負う者は、だれでも私のもとに来なさい。休ませてあげよう。」に支えられるものであるはずです。

「ちょっと一息 休もう屋」では、表だっのキリスト教の旗振り＝伝道は一切いたしません。しかし、福音に聴き、福音を生きる喜ばしい使命を頂いている私たちにとっては、信仰に立脚する働きとして、教会全体が心を注いで行く意味を見いだせるのではないのでしょうか。

*

運動をしたいから何かを始めるのではないのです。福音に仕え、主イエス・キリストに従う者としての祈りの中からの発露が「ちょっと一息 休もう屋」なのです。

一年前の2018年9月、茨城県竜ヶ崎教会よりお招きした、あの前向きで活発な飯塚拓也牧師がジュニアサークルスタッフの学び会でこう仰いました。

「旭東教会は恵まれた器が与えられていますよ。何かに生かして行ける可能性は大いにありますから、ぜひ頑張ってください」と。もしかすると、「ちょっと一息 休もう屋」の取り組みを始めることは、

飯塚先生が、外からお出でになった方として見たからこそお気づきになった、旭東教会の天来の宝を生かす愛ある助言に対する一つの応答かも知れません。

*

➤ のような取り組みをしようとする直前の
☪ 数ヶ月、実は私は、礼拝説教で取り上げ、み言葉を語らせて頂いている使徒言行録の 9 章から 10 章にかけてのペトロの姿を通じて、大いに考えさせられる時を過ごしてきました。

言うまでもなく、ペトロはイエスさまの 12 人の弟子の中でも、筆頭の弟子としての自覚を強くもっていた人物です。ペトロは日本名で言うなら「岩男」や「巖」。あるいは「岩夫」です。それが「ペトロ」なのですが、彼の心と頭は、あまりよろしくない意味での「岩」の状態が聖霊降臨以降も続いていたのです。

端的に申し上げるならば、ペトロは悔い改めが足

りなかった。使徒言行録に描かれているペトロは、この時もなお、不完全で、律法の枠組みに縛られ、福音を宣べ伝えようとしているにも関わらず、柔軟性が足りない人物であることがわかります。

*

これまでの、ペトロについての私の理解は
こうでした。

福音書の中のイエスさまに対する裏切り、逃亡のあと、復活のイエスさまに出会って、息を吹きかけられ赦しを得て、十分に悔い改めたと私は思い込んでいたのですが、それは勘違いでした。

まったくもって聖書の読み方が足りなかった。

彼は少しも完成された伝道者ではないのです。イエスさまがマタイによる福音書16章18節で「私はこの岩の上に教会を建てる」と言われ、教会の礎となることが期待されたペトロであったはずで
す。

しかしペトロは、様々な点において、変えられて行く必要がある人だったのです。異邦人伝道をペトロが担うには早すぎたとも言えます。だからこそ、使徒言行録では15章を最後にペトロの姿は消え、入れ替わるように、パウロが前面に出てくることになるのです。

*

世界各地の異邦人へ伝道をするためには、現状に見合った状況への変化が出来る人であることはどうしても必要だったのです。

福音によって絶えず変えられ新しくされて行く人こそが「悔い改め」を生きる人です。私たちは自らの力で変わることは出来ません。ペトロがそうであったように、エルサレムの教会を離れて出向いた地で人と出会い、話を聴き、祈りを合わせる。用が終わってからもなお、その地に留まり続けることで彼は変えられて行ったのです。パウロとは異なる形で目から鱗が落ちる経験を重ねて行きま

した。

*

イ エス・キリストの福音を信じて委ねる人は、時代の変化にも柔軟に従うことが出来る人です。それは、主イエス・キリストが、福音宣教を開始された時の第一声と不思議なほど重なります。

「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」。それがイエスさまの開口一番のメッセージだったのです。

*

私 たちがその主のお言葉から離れてしまっ
てよいわけがありません。私自身の歩みは旭東教会の歩みでもあります。そして、私たちの歩みは、主イエス・キリストの示される道を求めること以外にはあり得ません。

今という時代だからこそ、この地で出来ることが

あるはずです。「福音のためなら、私はどんなことでもします」というみ言葉を、私たちの告白として生きて行きたい。これは、2019 年秋、私たちに対して神さまから明確に示されているみ言葉なのです。end